

日本の美術館の魅力

バーバラ・ハートリー

京都は本当に綺麗な街である。日文研の外国人研究員のフェローシップをいただいた際に、このような伝統がある町に一年間住むチャンスに恵まれ、本当に有りがたく思う。そして、京都に来る前に「日文研に在る間に、もちろん研究は優先するけれども、毎週日曜日に必ず仕事を休み、いろいろなお寺や名所に行こう」と自分に約束をした。日文研のフェローシップが始まったのは六月三〇日で、既に真夏であった。京都の夏は人間が生き残れないぐらい暑い。京都の名所は観光客で動かないほど混み合っており、観光地の食事はまづいのにバカ高い場合もある（二〇一五年には京都が世界一の観光地として選ばれたので、観光客が急増した）。それでも名所の見学を頑張ろうと思った。自分が観光客として京都に来て、様々なお寺などの見学ができたので京都の魅力がよくわかったように思う。初めて日本に来た時から非常に親しみをもっていた平等院も再度訪れた。平安時代の平等院の状態を復活させた境内の中にある博物館に感激した。伏見稲荷大社の長く並んだ鳥居を通り過ぎると、周りの森の環境を美しく感じた。東寺で弘法大師が入寂したとされる三月二日に因んで、毎月二一日に開かれている市場にも行って、幅広く並べた骨董品にも魅力された。そして、今まで見るチャンスがなかった祇園祭にも参加する機会を持ち、心から嬉しかった。ただし、いくら素晴らしい光景であっても、人ごみに圧倒され、夏バテになり、ちょっと大変なところもあったのだけだ。

偶然なのだが、祇園祭の山鉾行列が終わってから、日文研の図書館に所蔵されていない本を調べるために、京都府立図書館に行くと、周囲にそれまで気付かなかった二つの美術館を見つけた。それは私の京都滞在を非常に楽しくしてくれた。

京都だけではなく、日本で一番魅力的なのは美術館じゃないかと思っている。ヨーロッパや北米から来た人にはそうでもないかもしれないが、私のように人口が少なく歴史も浅いオーストラリアから来た人にはそうである（この間、友人のオーストラリアの大学教授に引率されて初めて日本へやって来た学生に「日本にいる間に行くべきところは？」と訊ねられて、何のためらいもなしに「美術館」と答えた）。中世、近代、現代、どこをとっても日本の美術館には優れた作品がいっぱい展示されている。そして、日本人画家、彫刻家の作品だけではなく、世界中から集められた傑作が並べられている。

二〇一六年の秋、京都では二つの素晴らしい展覧会が開かれた。どちらも日本の美術界の豊かさはつきり表すのではないだろうか。九月から十二月まで、京都国立近代美術館（MOMAK）でメアリー・カサットというアメリカで生まれ、パリで画家として活躍していた印象派の女性画家の展覧会が行われていた。カサットは、母親が赤ん坊、子供などを抱く表象を描く画家としてよく知られている。数年前に北米のボストン美術館でカサット作品を三、四点を見ることができたが、今回は百点以上を鑑賞することができた。その中には、もちろん典型的な「母子」のイメージがたくさんあったが、私にとって一番面白かったのは、日本の扇子が表された絵画であった。よく知られているように、ジャポニズムという西洋人画家などが日本の美術スタイルなどに憧れを表した現象があつて、ゴッホ、ロートレックなどに強い影響を与えた。カサットがパリに行った一八六二年はジャポニズムの頂点で、彼女にまでも影響が及んだようにで

ある。私が見た日は、鑑賞者が非常に多かったが、誰もが静かにその印象派女性画家の傑作を楽しそうに見ていた。カサットの作品だけでなく、そのような満員のなかを鑑賞する人々を拝見することができて、楽しさは倍増した。

カサットは西洋近代美術を代表するが、美術館を出ると道の向こう側の京都市立美術館では、日本伝統美術の代表である伊藤若冲の「KYOTO 若冲」という展示会も開かれていた。私の研究分野はかなり近代、現代に偏っているので、中世の日本美術などにそんなに詳しくないが、数年前には四国にある金毘羅さん（固く呼ぶと金毘羅宮）と愛称された神社に行って、若冲によって描かれた圧倒的に美しい花の絵を拝見する珍しいチャンスを得た。金毘羅さんは非常に面白い神社で、金丸座という回転舞台を持つ日本一古い歌舞伎劇場がそばにある。境内には数々の美術品の宝庫があって、その中には円山応挙や伊藤若冲の作が入っている。その時に拝見した応挙作品は虎の表象で、実物そっくりのイメージであった。ニコニコ笑っているはずらっぱい表情をしている虎もいれば、恐ろしく猛獣的な格好している虎もいた。だが、大変驚かせられたのは、応挙という画家が生きている虎を見たことがない、と言われたことである。本物を見なくても、そんなにうまく描くのは本当に天才だと思わずにはいられなかった。絶滅の危機にさらされている虎は、もしかしたら私の一番好きな動物かもしれないので、応挙の虎を見られて本当によかった。だが、その応挙の虎よりも、若冲の樹花の図は信じられないほど見事だった。特に明昭元（一七六四）年に描かれた「花丸図」という作品は素晴らしく、産経新聞では「丹念に描かれた花々がコマ割りにおさまられているかのように規則正しく並び」と評された。

金毘羅宮で花図を見て、若冲の画家としての天才的な才能が分かったので、京都市立美術館

で開かれていた展覧会をいよいよ見に行こうと思った。さすが京都、展示の中心は若冲が描いた京都の風景などであった。特に魅力を放っていたのは鶏の図であった。応挙の虎と違って、若冲は本物の鶏を確かにその眼で何百回も見ることがあっただろう。だが、そのような無数の鶏のバリエーションを作り出せることも、天才だと思った。生誕三百年記念が日本全国で祝われた伊藤若冲の「KYOTO 若冲」の展示も日本の美術の素晴らしさの証ではないだろうか。余談だが、市立美術館の名前を変更する可能性があるという話を最近聞いた。京都市民にとって大事な施設を民間企業の名で知られるようになるかもしれないと聞き、ちょっと気の毒に思った。「市立」美術館とは、市民が所有している設備という意味で、そのような文化の共同的所有権は民主主義の特徴の一つではないだろうか。その所有権を失うのは、深刻な問題になるだろう。

さて日文研では「昭和期における大陸表象、——物語と視覚イメージ」というテーマで研究し、そのおかげで今まで殆ど日本近現代文学の分野で活躍していた私が日本の美術研究界と結びついて、大変うれしく思う。毎月どこかの美術館に行くのは、大変有意義で楽しい体験であった。例えば、広島市現代美術館で「1945-1955」という展覧会では、最近はかなり人氣を呼んでいる藤田嗣治の戦争画の一枚を初めて見た。「好き」という反応がなくても、その画家の、戦争のひどさを表象する才能を認めざるを得ない。戦争協力者なのに、藤田の戦争映像は日本人にとっても、世界中の人々にとっても戦争の空しさ、戦争の意味が全くないことを表す非常に大事な作品ではないだろうか。後に東京都美術館で、藤田が描く子供の絵も見て、ちょっと不穏な印象を持った。その子供が現代画家の奈良美智の子供とそっくりなのだ。「あ、

奈良が藤田に影響されたのかな」と思い、「藤田がその不気味な子供をやめて、戦争画にこだわった方がよかったのかな」とも思った。広島では他に桂ユキという女性画家の作品に興味を惹かれた。一九三〇年代前半を通して藤田のような画壇の男性画家から指導を受けた桂ユキは、一九三五年あたりから、コルクや葉っぱなどをキャンバスに貼り付けて、コラージュ作品を作り始めた。そのコラージュ的な絵画の印象は非常にパワフルで心に刻み込んでいた。ジェンダー研究に随分前から興味を持っていた私は日文研にいる間に、できるだけ女性作家、女性画家のものを調べて、彼女たちについての文章を書きたいと思っている。

女性画家といえば、松村綾子という画家もいた。仙台市生まれ、京都府立第二高等女学校に入ってから大隈関西で活躍していた。一九四〇年に京都市展の委員になって、二科会会友にもなったことがある。人物も静物も風景も魅力的に描いた画家で、一九三七年に描いた「影」という作品は、当時の不安状態を非常にうまく捕えた映像である。ちょっとシュールレアリスム的な絵で、前景が背中を向けながら跪いている着物姿の女性で埋められて、左には科学の記号の顕微鏡がある。背景は曖昧なのに、都市空間のような左側がだんだん荒地に重なって、何か脅迫的な印象が与えられている。戦時下の京都の女性画家の中では、西田幾多郎の三女静子も活躍していた。父親は日本を代表する哲学者なのに、静子はマイナーな画家で生年月日も不明のようである。だが、絵が綺麗で美術的な才能に恵まれたと思う。

藤田嗣治の話から明白であるように、日本の二十世紀の美術は不可避免的に戦争と関係がある。戦争関係の絵画を描いた女性画家に、富山妙子と丸木俊がいる。二人とも、日本の戦争責任を認めて、自分の絵画を通じて戦争の残酷さなどを表していた。妙子は中国の東北地方の哈爾浜（ハルビン）で育ち、地元の少女となかよくなって、戦後に「自分も戦争の加害者だ」と

気づいて、自分の美術を通じて、どのように帝国日本が植民地の人々を圧迫したかを表してきた。俊は夫の丸木位里といっしょに、世界中でよく知られたヒロシマの水墨画を創作して、二十世紀の大変な戦争犯罪の一つ、広島原爆投下の犠牲者の体験を半ば事実に、半ばシュールレアリスム的に描いた。夫は広島生まれなので、その夫妻には、原爆の影響がよくわかったのである。だが、だんだんいろいろな話題を取り上げて、水俣画も描き、沖縄戦画も創作した。広島画の価値はもちろん高いが、大日本帝国軍が犯した南京残虐の画はいくら恐ろしくても、ただ印象に留まるだけで終わってしまうかもしれない。四メートル×八メートルの衝撃的な大きさで、図の右側には五、六人の日本兵士に犯された裸の女性の姿が見える。丸木夫妻はチームとして絵画を描いたというが、陵辱を受けた女の図は俊が一人で描いた。来日前にその図の存在を知り、本の図版を何度も見ていたが、今回の滞在中に埼玉県のかかなり不便なところにある丸木美術館で実物を直接見ることができて、ありがたく思う。

外国人として日本の美術館に行く際には、若干美術館係員に迷惑をかけることもあるかもしれない。日本語の知識も、マナーの知識も足りていないからだ。しかし、助けてくれる人もいっぱいいるし、丁寧ないろいろと説明してくれる人もいる。その人たちのお蔭で、日本の美術界に楽しく入らせていただいて、すこしだけでも日本の美術を鑑賞させていただけることになった。外国人の研究者のフェローシップをいただいた日文研にたいしても、心よりお礼申上げる。

(タスマニア大学校シニア講師／国際日本文化研究センター外国人研究員)